

七草

泉鏡花作

一

「お嫁さん。」

此の奇抜なる言に、折から燈さへ一寸水を打つたやうな座敷の、面々驚いて是を見れば、當夜上席の縁女、お銀を正面、其の横手の首座。私とは筋向に、ちやくと構へた叔父的である。

これは従弟が祝言の、去年の春、正月七草の夜の事。婿方の媒人的人は、甥の私がうけたまはつた。

處で、敢て註に及ばず、神田正甫、七段の暮の打手は、正しく縁女の舅に當る。舅が縁女を嫁と呼ぶに、聊も不思議はないが、扨て不思議ではないと言つて、一月の朔日起抜けに、「やあ、元日か。」は可笑しからう。縁日に社の眞正面を切つて立ち、

「稻荷さん、」

と喚いた日には、毘沙門天と間違へないでも、參詣の群集は吃驚する。

で、今　　ー　　嫁さん　　ー　　と呼んだのが、恰
も三々九度の杯の済んだまでの場合　　ー　　尤も内
祝言も至極略して、唯形ばかり、雌蝶雄蝶を取交は
した新夫婦は、座も席も改めず、袴の藍と緋の下締、
美しく兩方氣味合で極るを合圖に、隔ての襖を眞中
の柱からサラリと開くと、白襟紋着の叔母さんが、
ちよきんとした帯腰で屈みなりに、叔父的が羽織袴
で頼杖ついた行火炬燵を、向うの隅へ押寄せる、ト
タンに扇子を挟んで立つ。直ぐに長火鉢の銅壺の中
に、お爛酒の徳利が見えようと云ふ、内端な遣方で
はあつたけれども、兎に角一世の晴の八疊。　　ー　　

兩人を正面に、叔父的と叔母御が座を並べる。次
に私と對向に、婿の兄、家業が違つて別居した、是
は或省の中間な處を勤める八の字髯が、洋服の膝を
些と氣にして控へた　　ー　　此の内君が、結立の
丸鬚で、背向きに長火鉢の前に、白足袋の新しい裏
を見せて、繻珍の腰を浮かせたは、直ぐにお銚子を
ひきあげて、相方に頼んだ出入の商人の娘を助手に、
お給仕をしよう誂へ　　ー　　其の兄の隣座が叔母
方の親類二人、どれも老女の、一人は剃立ての天窗、

薄鼠、同一色の被布を着た法體、年紀よりは少々し
く、丸顔の愛嬌づくつて目が細い。一人は小紋の紋
着、四角張った顔の色の蒼黒い、白髪を染めて小
な鬘に一結つた、背の高い、肩の聳えた凄いお局。
時々嫁の方を後目づかひで、面を背け、襖を睨み、
胸を屈み、頤を出す、こゝらが縁女に鬼門の方角。

向うは今言ふ其の人数で、此方側は、お銀の實父
を上席に、續いて嫁方の媒的人、下宿屋の亭主で名
を六助と云ふ、烟管筒をスポンと鳴し、でげして、
唯、然やう、ト又ポンと鳴すのが、ぞべりとして、
構へたり。

其の次へ、婿方の媒人として、私が控へて、私
の弟が相伴役膳は人なうして座蒲團の前に、あと二
ツばかり並んだが、こゝへは程を見て婿の兄の内君、
給仕の娘などが来るらしい。

主客ともに先づこれだけの、いづれも席が極つた
ばかり。彼方此方に、咳、衣摺れの音など二ツ三ツ、
一座さすがに寂として、さし俯向いた嫁君の花簪さ

へ、蝶が来て未だ動かさぬ其の處へ。唐突の、

「お嫁さん・・・」

一座聳目して、呼吸を詰めれば、叔父的め！ 指

を長く、膳に伏せた猪口を取つて、

「お嫁さん、一つ獻げよう。」

トついと出したが、手近な席に胸を切めた、極彩
色の帯の前。

傍かたはらに、ふつくりと圓まるく坐すわつた小造こづくりな叔母をば御ぜは、

困こまつたと言いふ顔かほをして、

「お嫁よめさんは可笑をかしいこと。」

ふふ、と照てれた目皺めじわを寄よせて、肩かたで笑わらふと、正甫しやうほ

は見返みかへりもしないで、

「何が可笑をかしい、嫁よめさんだから嫁よめさんよ。一つ獻あ

げます、受うけて下ください。」

唯トやつと高島田たかしまだの顔かほを上げたお銀ぎんは、緋縮緬ひぢりめんの擗から

んだ白しろい兩手りやうてを出だしたが、雛ひなが繰あやられたやうな覺束おぼつか

ない風ふう、袂たもとが靡なびくと密そつと受うける。

心得こころえて、づか／＼と來きて構かまへた、婿むこの兄正あにまさ一の、

彼かの内君ないくんが、些ちつと離はなれた處ところから及腰およしこしに注つがうととす

るのを、

「此方こちうへ、」

叔父をぢが引奪ひつたくつて、

「娶きなり早々さう／＼小姑こじうとの酌しやくでは不味まづい。是これも敵かたきの片かた

割われだ、はふは、俺おれが自分じぶんにお酌しやくをする。」

と瘦せた腕に紋着の折目高う、銚子を。口短に取
つて注ぐ、ト嫁は熟と身に染みたか、前髪挿の笄の、
艶照々と震へが見え、眉を隠して猪口を頂く。

時に婿君は額を上げて、黙つて嫂の、其の些と色
を作した顔を見て、悪い癖なり許されよ、と目で知
らせる、ト口許で莞爾と、嫂は無言の會釋。

叔父的、嫁の方へ向き直つて、

「扨て、お嫁さん、手前婿の親仁です。から役
雑ものでな、おまけに今年六十一だ。いや最う御覽
の通り、身代も同然、まるで是れ佐野の馬と言ふ瘦
せ方さね。しかし悴から見れば、瘦せたりといへど
も、五六段男は上だよ。先づ此の、私より五六段下
つた野郎だから、積つても知れます。よく世間ぢや
鳶が鷹を生む、と云ふが、何ういたして、」

とぐいと腕組、仰向いて打笑ひ、

「親鷹で兒鳶ス、何うだい、親馬鹿とも聞える

か。」

と捻向いて肩越しに睨むやうな目をする、と、叔母
は黙りで、唯膝に置いた手を爪探るのが、此の際珠

數でも持ちたさうな弱つた體。

「正さん、お芽出たうございますね。」

と、此處で法體の被布が口を入れた。

「然やう、昔の新造が御意の通り、此方は此の上もなく芽出たいが——いや、私も、今夜はじめて逢つて驚いた、嫁さんは美しい。以ての外の別嬪だ。」

と大きく言つて、

「こりや兒鳶には過ぎて居ます。此の容色で、此の妙齡で、私がやうな家へ縁附いて、其の野郎を一生の亭主にする……嫁御に取つて何が芽出たい。え、恚う婆さん連、厭に身贖肩をして、手前勝手にお芽出たの徒黨を組むな！ 謀叛人めら。は、は、いや、お媒的人もお聞きなさい。あ、見えて、あの尼さんなんざ、緋の裏の被布で居ます。お守護の中にや先の田之助の使つた小楊枝を入れて居ようと言ふ、大それたものさね。まだ、食氣たつぷりで、時々私に色目を使ふ……」

「何です、ね、父さん。」
と叔母は、後を言はず、口むぐ／＼。

下宿屋の六助、額をつるりて、

「結構でげすな。」

と言ふ。

「しかし、御縁だ、足らはぬ野郎だが、何分頼みます。さあ一つ頂戴しよう。や、水臭い、懐紙なぞ、おつけざし所望です。」

「勿體なう存じます、不束な私、お情に幾久しう、お見棄てなう……」

と口の裏で、お銀が、はつと手を支く時、叔父は手酌で、

「はい、」

と言つたが、さて續けて引かけた。

「これ、お嫁さんに、挨拶しないか。」
と早や赤い顔で顧みる。最も席へ出るまでに、嫁の車を待つ間、行火で冷酒を煽つたのであつた。叔

母はむつくりと顔を上げて、

「新さん、何とかお言だっけ、」

と私に言った。

娘の酌の猪口を置いて、

「高島さんの、お銀さん。」

と、私が縁女の名を答へた。

「高島善造でございます、申後れまして失禮を。え、はじめて御意を得ますが、」

と年紀よりは苦勞に老けた、お銀の實父は、重々しい口を漸と利く。・・・

「え、家内も罷り出ます筈の處、餘事でございますん今夜の事で、何とも恐縮をいたしますが、暮の忙しさから些と其の鹽梅を悪くしましたので。

はい、否、大した儀ではございません。今夜とても、宅を出まするに就きまして、娘の身の世話など彼これ仕りました位で。え、臥つて居ります程ではございませんが、恚やうなお席へ、霜げた顔を差出してもございますまいと、故と控へましてございます。六さん、貴下からも、よく其の邊を・・・」

で縞の褌衣で引括つた大な手を、草臥れた嘉平治の上で頻に揉む。

と未だもの言はぬ六助に先んじて、叔父が向うから、一寸手を擧げ、

「いや、追つて杯を持參で御挨拶に罷出ます。間を置いてはお話が和熟せん。先づ、お平に、

お在でなすつて、御氣根に召飲つて下さい。何か御内寶御加減が悪いさうで、其奴は不可ません。千秋萬歳の折からお目に掛らいで残念な。」

と正面に半ば目を瞑つて眞面目に言つたが、上ぎまに眉を開き、

「しかし、お娘御さへ首尾よく御輿入下されば、何、御面倒なら、貴下だつて寒いにおいでは及ばん位で、」

些と掠れ氣味のニびた聲で、空嘯いたやうに言ふ。
一座爲に色めいたが、正甫眉の端も動かさず。

「何も嫁さんが眼目で、我々はこれお互に並び大名、實は當席に用のない身體です。が、空家で三々九度をするでもないのので、下手な尉と姥の書割に夫婦揃つて寵出ました。隣が、ちよい髻の洋服に、お隣が坊主、續いて般若のお局か。いや、又見苦しいのが揃つたて。いづれも嫁さんには邪魔なものばかりだ、喃、おい新公。」

と私を見越す。

「まあ、然う思つて在らつしやれば間違ひはありませぬね。」

隣座の弟と顔を合せ、莞爾笑つたを、じろりと視めて、苦笑ひをして、座中を瞻り、

「あの口をお聞きなさい、あゝ言ふ不心得な奴です。馬鹿な倅と厄介な甥は、天下誰にでも附きものと見えます。はゞ、困つたものだ。が、其の馬鹿な倅の嫁を、厄介な甥が世話をしたにしては、些と此の嫁さんは出来過ぎた。えゝ、新公、お前なり、倅なり、いづれ其の南瓜野郎……」

「南瓜は酷い、叔父さん。」

「いやさ、唐茄子にしる、ぼうふらにしるだ。」

お前たちの女房は、長屋の窓か、井戸端か、芥溜の中から拾つて来い。お三どん守つ兒に留めを刺すぞ。其のかはり、近頃の流行だが、あれは不可ん、何さんなど汝が媽々を様づけにするやうな不了簡を起すな、と言ひつけて置いたを忘れはせまい。倅も望む、他にも異論はないと言ふから、可いか、三々九度をする今夜まで、己は嫁御の名も知らず、其の親御の

苗字、御商賣、御住居の邊も能くは知らん。聞いた
かも分らんが、覚える用もないから忘れたほどだが、
何うも恚う見受けた處が、井戸端で見掛ける柄でな
い。些と美し過ぎるぜ、これは。何うやら然るべき
御臺所だ。

何、何とか言つた、お嫁さん、お銀さんか。何と
何うです、悴めの鼻の下が、早や青く伸びて見えま
せ、うな。」

「父さんの癖だからね、酒を飲むと最う見境が
ありません。ね、氣におしでないよ、え、お銀。」
と早口の叔母が言ふ。

「お銀、何がお銀だ。生意氣な口を利くな。婆
さん、悴には、媽々を様づけにするなど言つたがお
前に呼棄てにしると誰が言つた。――べらぼう
め、お銀さんは人様の大切な娘御だ。其の大切な娘
御を、そつくり身體ごと下すつたのよ。頂け、難有
く思へ。これ、恚う尋常に、聞けば一二十一までお
育てなすつた、御丹精を考へる。姑婆に呼棄てにさ

れて間尺まじやくに合あふかい。
トぐい飲のみ。

四

「以後もあるこつた、婆さん分つたか。」
と又手酌。

黙つて俯向いた叔母は可いが、尼御前とお局が密
と囁く。正一と其の内君、――これは丁ど嫁の
親の前に銚子を持つて侍つたのが振返つて、其の夫
と、眉で稻妻を通はせた。

實家の親は慌てた状で、急に何か言はうとしたが、
頓には然るべき言句も出ないで、口へ手の蓋して、
ごほんとかく。

事體穩ならずと見て、媒的人の六助、矢庭にばた
／＼と手を振りながら、
「や、や、飛んだ御意で、御舅御しばらく。是
非、其の、お呼棄てが願ひたい譯でげて、何うも
此の、其の、何でげて、お姑が様づけでは、其處
にお隔てがあるやうで。御縁女も嘸お氣遣ひ、な、

善さん。」

と隣座の羽織の袖を引くのが、背中を叩くやうな
手附になる奴。

「え、何とも恐入つたお言で、手前も御挨拶
に困じ果てます、――え、何しろ御覽の通り
の不束もの、……其に親どもが届きませんで、
賤萬端お話にはなりません。お針とまでも望みます
まい。洗濯女、飯炊と思召しまして、お臺所の隅に
なりとも唯何時までも差置かれまして、」

と善道は平に頭を下げる。ト向うから押上げるや
うに胸を反して、

「いや、勿體至極もない。手前どもは土間へ下
りても、お嫁さんは座敷に置きます。高島殿お銀さ
んは、神田正甫の嫁さんです。が忤正雄には媽々だ
から、様扱ひにはさせたくない、其の段は御承知下
さい、忤、何うだ。」
と唐突に打附る。

「え、」

正雄は當夜はじめての聲を出した。

「お銀、と一ツぞんざいに遣つて見る。」

「明かに呼べ。」

「事明細に願ひたいな。」

正雄の困ずるのを取做顔に、六助は羽織の袖をひら／＼と額を叩いて、

「へへへ、御親父様は、大分御機嫌で在らつしやいますな。」

「お父さん、」

と正一が洋服の膝を割つて、

「其の當座には、一寸呼棄てにし憎いもんです。

ねえ、新さん。」

と私に言ふ。

「鱧髯が惚氣を言ふわ。ねえ、新さん、いや其の野郎が、媽々の味を知るものかい。やすものばかり

り買ひやがつて、年中素裸のびい／＼小僧、ひつて
んな處ばかりは兄弟揃つて曾我だ。

工藤左衛門對手になるが、何うだ一番飲競をする
か。いや、意氣地なし、酒にかけても老武者の片手
にも叶ふまい。

誰方もお聞きなさい。一昨年も、暮から春へか
けて、新の野郎を函嶺から熱海へかけて連出しまし
た、奴が體の可い駈落の尻押さね。――三島
越をして静岡に一泊、其の安倍川べり一二長町の古
き都に来て見ればさ、御酒肴から小物まで、黒板に
胡粉で白く、門口にこそは顯したれ。

中位な處へ押上つて、ト先づ對方が二人に不思議
はないが、いや、甲乙較べものにならないほど件の
奴等の玉が違ふ。處で、此の方、金札大王の暴威を
振つて、若くして且つ美しいのを生捕つた。何と其
の膝枕に、いきり立つた、此の下谷一番と言ふ大禿
を載せて見せびらかしの、

「可愍さうだ、取つ交へようか。」

取つかへて遣らうかと言つても、

「否、否、何、」

か何かで、逡巡をする。遠慮さね。一目見ても、

「と小鰭ぐらゐ相違があるのに、意氣地はない。何
爲圖々しく欲しいものは欲しいと言はん。――凡
て其の了簡方だから、惚れた女を人に取られて、ま
じノ、と一人で腕組をする、其の姿は。袴が借り物
だけに猶寂しい。」

「まださ、其の借りた袴を打殺して、歸り途におで
ん爛酒でも煽りつける奴なら話せるが、今に、誰方
も御覽じろ、」

「叔母さん、皺になりました。」

「と脱いで行きます。いや、其の不心得な事と言つ
たら。」

「今夜なども、恚う二人並んだ處を見ては、獨り身ものが嘸羨しからう、もしさ、此の嫁さんに惚れて居るなら、遠慮は無え、引攪つて此の場からでも駈落しろ。義理も容赦も浅い中だ、夢中に出刃でも振りまは振廻せさ。」

私の胸の切つたほど、叔父の目色は強かつたが、フト心付いたやうに、傍なる春の芍薬、奇しき宵の風情を視めて、

「いや、お嫁さん、貴女はじめ、いづれも氣にしちや不可ません。獨身ものゝ甥の野郎が世話をした嫁さんだから、悴より前に、何か知己でゞもありはしないかと、疑つたやうに取られては迷惑します。―― そんな、しみつたれを言ふんぢやない。たとひ甥の奴がお古でも、悴が承知なら私は構はん、古を承知するやうに育てた私が、因果だと斷念めるんだね。」

今言つたのは然うぢやない。憊う二人揃へて見
した、嬉しいにつけて、最う一人此の席へ坐らせた
い、其の正雄の妹が一人あるが、他所へ縁付いて今
の處他國に居ます。」

と思ひも掛けず愁然として、

「新、齡から言つても、正より前に、爰へ二人
で並ぶんだつけな。」

「叔父さん、」

「何ですな、こんな席で、」

と厄前とお局が一所に言つた。

「何を、己は男だ、女どもが大勢居て、早く何
うにかす、べきだつた……が、何にもいはん。
いや、誰方も。それ以來、嫁はたとひどんなでも、
正が好きな人を、と思つた。」

處で、御覽の兒鳶です。あれこれは僭上だ、井戸
端か芥溜を小春日和に狙つたら、引掛る女もあらう
と思つて、上を望むな、空を見るな、と申したに、
些と嫁さんが過ぎたやうだ。新公、」

「は、」

「こりや何處か、二階の欄干か、四疊半の中か
らでも連れちや来ないか。」

「もし、」

と此の時、實家の親父善造は、人の好い、面長な
額を、燈火に照されながら、

「お舅御、いや、最う二階は二階でも、根津の
然る長屋の、家根裏同然な處に親子一三人巢を喰ひ
まして内職をして居ります。家内が病氣と申しまし
ても、實は是へ着て出ます、上つ張りがございませ
んの。手前の此の態とても、以前、質店をしまし
た時分使ひました番頭の、唯今何うにか遣つて居り
ます古着屋の品でございましてな。」

實は甥御はじめ、此のお媒人的人のお迎も、今晚其
の古着屋の奥で、お請けいたしましたやうな次第で
ー ー 娘の支度とても、甥御と、それに、御令
息・・・・・婿様が其の、御心配下さいました。」

と汗を流す親には見えまい。尼をはじめ、・・・

・叔父をのけた一座不残、じろりと正面を見遣つたので、お銀が瞼の紅は、霞を拂つて颯と消えた。

「……で、其の芥溜も同然、其の邊は御安心。」

と、善悪は分かずどきま言ふ、ト此の時小酔のお媒的人、手の甲をべた／＼ぱん／＼と餅に搗いて、躍らす如く膝を動かし、

「右同断、六助も借着でげす。此の女房も、廊下で、這つて怪我とはいつはり。前垂の下は膝抜けのがつくりで、矢張芥溜に縁がごわす。凡て、敗亡、一切露顯、チエ、残念や見顯はされた。だが、もし、御縁女はお受合ひ、盡々くお兄弟が御存じで、毛頭一憂慮はございません。」

「叔父さん、」

と弟が、これも借着の羽織ながら、氣競つて裾を刎ねたところは、背丈も高く、兄よりは柄が可い。

「一寸申上げます。何です、お銀さんは、其の、

叔父さんの註文通りの……です、井戸端や
芥溜からぢやありませんが、實は何です、改めて申
しますが、草の中から発見したんです。」

「何だ草の中、」

とろんこの目で此方を仰向き、

「馬鹿野郎、藪から棒とは其の事だ。」

と打棄るやうに言つたつけ、――何か聞きた

さうでもあり、腕を高く拱いて、

「はゝあ、草の中。」

「えゝ、去年……今ぢや最いう一昨年の
秋、正雄さんと、兄と僕がお供をして、田端から諏
訪へかけて、暗の晩、蟲を聞きに出掛けたでせう

――叔父さん、貴下が發頭人で。」

第六章

「發頭人とは何事だ。まるで徒黨を組んだやうに大袈裟に言ひやがる。――何だらう、池の端の蓮玉で一杯遣りながら、道灌山へ蟲聞きにと言出すと、おつとまかせで、お前たち賛成したのは、各々己の懷中に狙をつけて、其の實、伊豫紋あたりで三味線の音を聞くことゝ心得たのを、眞個停車場へ連込まれて、お剩に正宗の壘を三本と持たせられて、歎息した時の事だな。怪しからん、不孝な奴等、叔父を何と心得る。」

べろりと舌なめずりをする。話をそらすまいと、正一が軽く手を拍つて、
「謹聴々々々。」
と言つて笑つた。

「最う田端の停車場から、坂道を辿つて、道灌山へ上るまでも手探りでしたね、眞暗闇で。上へ出ると、何處か不知火のやうにちら／＼と見える燈火で、其でも手許ぐらゐは見え出したら、早や其處か

ら持つて来た猪口を出して、冷酒をぐい／＼と・・・・叔父さん、貴下からおはじめなすつた。

蓮玉の下地はあるし、九月の中旬、蒸暑い盛りでせう。吹晒しても酔が早く、皆相應な好い機嫌で。

中でも叔父さんなんざ、叢をよろ／＼だ。一番がけに、葭簀張へドツサリお突當りなすつたね、・・・吃驚して二人、廣重が描いた遠花火を見る墨繪の人物のやうに遁出したものがあつたでせう。

ー やあ、愉快的、世間を亂す山賊退治だ、四天王山入なんてつて、お騒ぎなさる。・・・其の物音も大概な蟲は鳴留むのに、時々思出しちゃ、然う言へば鈴蟲松蟲は何うしたよ、些とも唄はないが、これ何處へ隠れた、顯れるツて、洋傘で無暗に草を引拂いたではありませんか。何處の國にか蟲を聞くのに原を薙ぎ立てる者があります、あれは何事でございますか。」

「 舊惡露顯、」

と苦い顔色。

「論語を讀め、子は親のために隠すとあるは、
親なき汝等にと取つては、おのれ！」

まさかず
正一が、

「謹聴々々……」

「何うせ僕たちは、お附合。蟲を聴きたくも何
ともない。馬鹿にした轡蟲が、ぐわさ／＼と喧ぎ立
てるのが、頭痛に響く／＼らみなもんです。――早
く掛茶屋でも見附けて休みたいと思ふのに、叔父さ
ん、貴下は其のひよろ／＼の癖に氣ばかり強くつて、
無暗と前へお立ちなさんだから、僕たちも後につ
いて蹠々蹠々、諏訪の見晴へ出て、漸と柱はかり坊
主の圍のやうな掛茶屋へ辿りつくまで、頓て二時半
掛つたんです。」

が、其の暗さつと言つたら、あの見晴から空を見
ても、螢一つ、星もない。

さあ、若いもの、度胸を据ゑろ、此處が風流だつ
て、又飲はじめたは可けれども、柱を繋いだ針線に

引掛つて突のめる、床板の剥れた穴へ尻餅を置いて悶くのがある、寂として風もないのに、僕たちばかりが其の騒動。

大分夜も更けたと見えて、あの社の大木が轟と云つて鳴り出しましたね。後ぢや汽車の音が籠つたんだと気が付くにや付きましたけれども、第一臆病な兄が眞前に歸り風を哄と吹かして、まあ心覺えに、あの社の境内を突切つて、あれから谷中へ切れようと言ふ所を・・・おや、何處へ入つたらう、樹の下だ、草の中だ、何うやら路ぢやないさうだ、と気が付いた時分にや、全然方角が分りますまい。

三人が各々、一箱の、然も途中で散々使つた火燧を一本づゝ引擦つては、一三方へ分れ、立つたり、蹲つたり、背中合せになつたり、何處へ灯を突きつけて見ても草ばかり、情ない事には火燧が悉無になつたらうではありませんか。

洒落や串 戲事ぢやなくなつて、眞面目に、變だ、可訝いと、足探り、手探り、其も思切つちや伸せま

せん、澤山町を離れないだけに、肥料桶があるか、
埋井戸があるか分りますまい。

「野狸だ、高が野狸だよ。」

と叔父さんは仰有つたが、たかゞ野狸で澤山なん
です。

「思ひ切つて突切れ、海坊主の胴中を、さあ港は
見えた。」

ツて酔つた勢、貴下が踏出さうとする處は、どう
やら一寸一足で、がっくり底の知れぬ崖に見える」

第七章

「危い、お待ちなさいと云つて、留めれば留めるほど、面白づくの意地に成つて、高足をお踏みなされる、——此方は、少いものが三人まで附いて居ながら、老人に、」

「意地の悪い事を言ふぜ。」

「謹聴々々。」

「老人に何ですね、怪我をさしちやあ言譯がな
いと思ふから、大生酔でも叔父は叔父で。」

「大生酔だけ餘計だよ。」

「謹聴々々。」

「御馬前に立つてお生命に代らう覚悟で、瀬踏をしますと言つても前へは出さないで、無暗と踏込まうとなさるから、背後から、權の口を緊乎と掴むやら、腰を抱くやら、袖を曳くやら、餅に搗いて揉抜いて、弱り切つて、

「叔父さん、確乎なさい。」

「お父さん。」

と宥める聲が、まるで臨終を呼活けるやうに夜陰に響いて、心細くなつて、涙ぐんだ時でした。

ちらりと赤い光の見えたのが、蠟燭の裸火で、眞暗な草原へ、雪のやうに立つた姿があります。――透すと、其の背後が、窓の黒い、小さな小屋で、……其の人の、此方へすら／＼と歩行いて寄るのが、屋根を離れて来るやうでした。え、僕たちには宛然星の使に見えた、難船の折から燈明臺の女神を拜むやうだつたんです。」

いや、愚弟めが苦々しい言を云ふと、兄は獨で頻に飲む。

「餘り蒸暑さに、寝られぬ晩の、草原の其の騒ぎ。――はじめの内は恐怖かつたが、何うやら暗闇で、路に迷つて難澁な人達らしい、と見かねて起きて出たんだと言ふ。」

其の何です、蠟燭の明で見ると、路に踏迷つたも

凄^{すさま}じい、四人^{にん}が捏^{こね}返^{かへ}して揉^もんでた處^{ところ}は、三萬^{まん}方里^{はうり}もあると思^{おも}ふお釋^{しや}迦^か様の^{さま}掌^{てのひら}——蛇^{じや}の目^めほどもない草原^{くさはら}で、直^ぢき其處^{そこ}が車^{くるま}も通^{とほ}る路^{みち}なんぢやありませんか。

「果^{はた}して魅^まられた、的^{てつ}切^{きり}野^{のだ}狸^{ぬき}だ。」
つて叔父^{をぢ}さん。

其處^{そこ}に立^たつてる人^{ひと}が人^{ひと}だけに、少^{わか}いものが、極^{きま}りを悪^{わる}がるも構^{かま}はないで、

「今^{いま}でも居^あますかな。」

なんて、眞^ま面目^{じめ}に話^{はな}して、

「全^まく貴^{あな}方は神^{かみ}佛^{ほとけ}だ。白^{びやく}衣^えの觀^{くわん}音^{のん}。」

だの何^{なん}のツて、醉^よつてるから……袖^{そで}なしの寢^ね着^{まき}のまゝなのを、お氣^きの毒^{どく}な、拜^{をが}んだでせう。

それから、其^その蝟^{らふ}燭^{そく}を兄^{あに}が貰^{もら}つて、罌^{びん}の酒^{さけ}の未^まだ殘^{のこ}つたのを、構^{かま}はず蟲^{むし}の涙^{なみだ}に草^{くさ}へしたんで、あの底^{そこ}へ其^その明^{あかり}を立^たてたのを僕^{ぼく}が持^もつて、やう／＼漆^{うるし}のやうな樹^きの中^{なか}を出^でましたね。谷^や中^{なか}の坂^{さか}で瓦^が斯^す燈^{とう}をはじめて見^みた時^{とき}まで、些^{ちつ}とも風^{かぜ}はないから、各^{めい}々^{／＼}汗^{あせ}は流^{なが}

れても、蠟燭は消えないで點いて居ました。

其の晩の其の火は、正雄さんの身體に附いたお銀さんの魂です。お銀さんは其の時分、お家の活計を助けるために、持主の婆さんに頼まれて、諏訪の茶店に居なすつたんです。」

「謹聽、」

と言ひ懸けた、正一も眞面目に黙つた。

「其の後、また今年……いや、つい去年の秋、其の時は僕は一所ではなかつたんですが、正雄さんと兄を連れて、叔父さん、廣小路へ出なすつた事があります。」

兄は何の家だか知つて居ます、ビヤホールへ入つて、矢張、貴下が大生酔、」

「又、酔つたのか、いや、自今禁酒だ。」

さすがの叔父的參つた形……其の癖杯を下へは措かぬ。

「階子段から、雪類を打つて、どた／＼と通へ
出た。三人連、――池の端の車帳場と空也の店
との、何處か一寸燈明の切目に、かんでらの店を出
して、蟲を賣つて居た娘があります。」

眉の隠れる姉さんかぶり、通りへ顔は背けたし、
浴衣も着實だつたさうですから、

「ほう、意気な年増が、」

つて叔父さんは言つたさうです。殊に例の酔眼朦

朧ながら、えゝ、貴下には、――

弟は密とお銀を見遣つた。

「又其の時も叔父さんは、草薙流でさ、蟲籠に地震を揺らせて、店へどつかりと肱を支いて、

「おもしろい、松蟲か。其奴買ふべえ。値段は構はないから鳴くのを寄越せ。」

ツて、羽箒で籠へ移させながら、

「何だか鳴きさうもない。道灌山で管を捲く酔拂ひの松蟲だらう。」

「叔父さんぢやあるまいし、と兄が悪口を傍で消す。」

「顔ばかり見て居やあがる、蟲を見る／＼、」

「姉さん、屹とだらうね。」

と正雄さんが顔を見たんです。

「はい、屹とでございます。」

つて其の娘は俯向いたんですつさ。

「正、其の籠を持つて来い。」

叔父さんに言はれた時分にや、其が、何時かの諷

訪の森の美しい方だから、正雄さんと兄と、従兄弟
同士、思はず袖の下で手を取合つて居たんださうで
す。」

「はゝゝ、可厭味な奴等だ。」

と叔父的此處で又苦笑。――正雄と私は、人

知れず微笑んで相見たが、と見ると、お銀の黒髪は、
燈火の影が幻の手拭に翻然と成つて、角隠した風情
に見える、頸は一際雪のやう。

弟は一息吐いて、

「それですもの、何を何うしたか、買ったのを
持つて歸つて、叔母さんにも見せよう、と其處の茶
の間で、」

と顧みる。次の六疊に續いた、臺所口の障子には、
七輪の火が赫と映つて、暖い湯氣の立つた中から、
女中交りに手傳ひの婆さんなど、三ツ四ツ、襷で
勝つた面が累る。

「買つて来た籠を見ると、中は空です、透かし
ても振つても、磨竹の影ばかり。」

「おや！」

「まあ、お前。」

と叔母さんも拍子抜けをなすつたさうだが、叔父さんは、そんな事は委細構はず、高躰だ。

尤も取違へたのは此方だから、前の不深切と言ふではなし、駒込から廣小路まで、わざ／＼取替へに行くほどのものでもないから、其のまゝに成つたんですが、籠は正雄さんが臺所へは出さなかつた——果して兄の思ふ通り。

何だか残惜いから、空なのを其のまゝ、月の影も中に射せ、と正雄さんが部屋の軒にかけて、其の晩寝られなくつて、枕をしながら熟と視めた。

眞夜中頃、さら／＼と風が来て、チン、チンと露が落ちて、チロリン、コロリンと、それから鳴く。

誰にも言ひはしなかつたが、秋の末まで毎晩聞いた、と後で僕たちに話したんです——

其の筈だと、僕は思ふ。」

と弟は云つた。

「お銀さんは、其時約束した松蟲の籠を袖にして、每晚根津の家の前に出て居なすつた、商を仕舞つてから、秋の末まで、よくも寐ないで。．．．．勿論其の夜、

『あゝ、籠が間違つて、』

と氣が着いて、はつと思ふと、もう茫然して、冷かしが來ても、あひしらふ氣も注かないから、唾の蟲賣だ、と思つたでせう。誰も露店へ寄着かない。餘り歸りが遅いから、案じて、お母さんが見に來なすつた頃には、姉さんかぶりの手拭が、何時の間にか、外れて、お銀さんの唇に啣へられて、髪は夜露で洗つたやう、其の籠の蟲が一つ、廣小路の星明に、美しい聲で鳴いて居たつて言ふんですから！」

座は寂とした。

床に掛けた容齋の茶掛の一幅、大橋の擬寶珠に懸けた輪飾の、裏白に白く霞が染まつて、赤々と出た旭の色も、颯と曇つて月のやう、．．．．島田の影が柱へさして、戻りとある鬢も、夫戀ふ蟲の姿に

見^みえた。

戸^{おもて}外^{かせ}は風^{ふき}が吹^{とほ}通^{とほ}して、中^{なか}空^{そら}から歌^か留^る多^た取^とる聲^{こゑ}。

「お話^{はなし}はかはりまして、
と弟^{おとうと}が話^{はなし}を次^ついだ。」

「黄色^{きいろ}い聲^{こゑ}を出^だすなよ。」
と言^いふ、沈^{しじ}んだが叔^を父^ぢの此^この言^{ことば}に、一^{いっ}同^{どう}は哄^{どっ}と笑^{わら}
つた。

「前に、下宿をして居ました縁で、近ごろ僕が所帯——とは言つても其の實、自炊をするやうに成りましてからも小山さん——」
六助にも苗字あるなり。

「今度のお媒の人が一寸々々遊びに見えます。話の次手に、當家で正雄さんに嫁さんを探しておいでなさる事を言ひました。尤も豫て叔父さんの御意見通りの井戸端説を唱へたんです。

膝を敲いて、持つて来いと言ふのがある。

以前は本郷の金助町に、大店の質店で高善さん、悪い奴に欺されなすつて、其の後行方が知れなかつたが、つい近い頃、或旦那の供をして日本橋の然るお茶屋へ行くと、帳場に坐つて、帳面をつけて居なすつたのが——此の側の御上席。

「や、高善の旦那、」

「こりや、六さんか、お恥かしい。」とめぐり逢つた。それからのお話で、根津に母子三人で詫住居

をなさる。尤も男のお兒は何處かへ奉公をなすつて居て、お内にや嬢さんが。

もと／＼世話に成つた旦那なり、手札がはりの土産を持つて、其の後お住居へも伺つて、娘さんにも逢ひましたが、御新造が楊枝の内職、一所に燻つて稼いでおいでだ。お勧めをするのは此のお方。――お氣質萬端申分なし、當節柄妙齡の其の御容色で、あゝして困つておいでなさるだけでも、御品行は思ひ遣られる。地獄に佛と言ふ事は、何も救助船が來た時ばかりではない、と言ふんで。

ぢや見合ひを、と話が進んで、僕の許で一幕出ました。――正雄さんは暮方から來て飯を済ます。燈が點くと、路地の外で、から／＼と俵が留まつた。――二臺、小山さんが案内をして、お銀づんのは相箱、これには小山さんの娘が一所に乗つて附いて來たんです。

可笑かつた。僕は落着いて居ましたがね。變なものです、正雄さんが僕の机に凭かゝつて、鉛筆で無

暗に、（見合ひ）（見合ひ）と夢中でぎいたのは振
つて居ませう。其の筈です。僕も見て驚いたが、い
つかの諏訪の森の美しい方ですもの、．．．些
と後れつゝ駈けつけた兄は尚ほ驚いた。松蟲の時最
う一度、念入りに見て知つて居ますから。でも、酒
が出るぢやなし、藏前の羊羹とまでは氣張りまし
が、御馳走はそれだけ、お茶ばかり。

しかし、場馴れた小山さんが、いゝやうに應接し
て、廊下へお顔、と云ふやうな事もなしに、一九時
頃お開きと言ふ時、お銀さんが結立ての高島田で、
ぴつたり手を支いて、

「何うぞ、お願い申します。』ツて言はれたのを、
兄は忘れないと言ふんです。．．．如何にも、
おしをらしい、然もぼつと上氣をなすつて、立ちし
なに上前が狭く、足の白かつたも借着の襦が淺かつ
たんで、挿込みの銀簪も、僕が見覚えのある下宿屋
の其の娘さんの持物で、」
「待て、待て、其の娘さんは、何か、お前の情
婦か。」

と白眼にして、叔父さんニタリと成る。

「え、」

と言つて談者大にひるむ。

「謹聴々々、」

「まあ、そんな事は。で、瞬く間に話は極まつて、兄から御相談をすると、それでも信用があるかして、叔父さん、叔母さんも御承諾に成りました。

處で、兄が、當方の、—— 小山さんが彼方の、媒人的人と云ふ事で、愈々結納を持つて行く時に成つて、兄が受取りに来る、ト叔父さんが、

『種々、世話になる、時に嫁さんの名は何と言ふ。』 ツてお聞きなすつたのにや、思はず吃驚して、ハツと成つたと言ふんです。

「まあ、」

「何て、まあ——」

と尼前とお局が囁き合つた、が些と聞えよがし。

「兄は其の時吐胸をついて
 「此の質だから蒼く成つたが、一生の智慧を振
 つて、

『戸籍は凡て弟の方が掛りです。』は苦しいでせ
 う。……叔父さんだから其でも通つた、――
 で、結納は、と云つたが、根津のお宅は知らない
 から、風呂敷包を引抱へて、小山さんの内へ出向い
 たもんです、其處へ行くのも兄は最初。萬事松蟲の
 聲……と御承知下さい。如何に何でも、たと
 ひ借着にもしろ、紋着袴で居るものを、小山さんの
 方でも又根津の屋根裏へは遣はせません。

――處で、結納は途中で小山さんが預りました。
 又此の人が借着の夥間。」

「いや、爆裂弾。」
 と言つて、六助興覺顔。

「最一つ弱つたのは、間際に叔母さんから、
 『荷物のないは承知だが、風呂敷包でゞも來るの
 かい。』これに又大凹み、風呂敷包も何にもない。

お銀さんは着のみ着のまゝ。一寸申上げますが、兄は女房が前垂がけで、

「今晚は、」

臺所から入ると、もり蕎麥で祝言と云ふのを理想にして居るんですから、それで事は済むものと心得て居た處、――叔母さんの一言に面くらひ、正雄さんと額を押着けて、……何處を何う工面をしたか、……勿論、叔父さんと叔母さんから、ものは出たらうと思ひます。お銀さんの今夜の晴着と、風呂敷包が出来たんです。

一喝年の中にお儀式をと言ふのですが、押詰つて支度が出来ず、それに又、丁ど幸ひ、秋と春とは違つても、松蟲の思出、と七艸の今夜を、兄が願つて選んだのです。これで萬端洗ひざらひ、――何にも言ふ事はありません。」

「飛だ狐の嫁入だ、と思ふ方はお思ひなさい。」
と嫁を見た私は居直つて、

「顔を上げなさい、お銀さん、私だちがついて居ます。」

「む、狐の嫁人おもしろい！・・・」

と叔父は嫁の前をづつと来て、私に向つて、どかと胡坐で、「俺らそんなのが大好だ。よく、お前たち世話してくれた。」

「全く縁ですな。」

と洋服は未だ膝を崩さぬ。叔母は時に目を上げて、お銀の容子をじろりと視める。

「芽出度うげす、お芽出度い。」

と、六助はふら／＼して居る。尼前とお局が、此方同志は、と膝を突合はせるやうに横向に坐り直つて、

「よくして貰はねばなりません。」

「當家のお嫁になんすつて、ほんに幸福な娘さんだ。」

「何を、」

と肩越に叔父が見向いた。

「何を言やがる、狸婆あ！」　チヨと舌打で、

ぐたりと手を支き、胸を捻つて首を据ゑたが、

「八百比丘尼妙椿め。腥の折を攪つて、可い加

減に最う歸れ。以來、手前たらが寄つて集つて、嫁のあらを捜すんだ。氏の素性のと碌でもねえ、何だ尼茶尼ぢやねえか。御華族、御高家へ出入りをして茶の湯活花を教へるツて、汝がお大名の氣で居やがる。大事な嫁を蔑みやあがつて、幸福な娘さんだ、――氣に入らねえ言を云ふ。

よくこんな内へ嫁てくんすつた、難有えと何爲思はん。

――こゝに居る此の甥と、死んだ娘との仲を裂いて、無性に從何位とかへ縁づけたも、手前ださうだ。ママもママだが、ママはママよ。妙椿汝が狸だぜ。

恚う新、堪忍してくれろ、俺ら稼人だ、然も出荷賣だ、何にも知らねえ。」
と叔父が手を取つた時、弟が、密と私の背を撫でた。

「情のねえ俺たちの兒とも言はねえで、正に、よく嫁を世話してくれた。茶汲結構、蟲賣結構、

一七草狐の嫁入愉快い。嫁が、ぢごくなら尚妙だ。」

「いや、お媒の人、お聞きなさい。先刻、これへな、貴下方が車を並べてお乗込の時、かたりと楫棒が式臺へ着くと、どの車夫か、聞えよがしに、

「屋根裏の銀簪が、好い鼠に引かれた。」

言つたつてね。玄關裏に待ち構へた尼めが頭を掉立つて、裾ふわで、驅けて参り、行火に居ました私の耳を引張つて囁いた、――御合點かい。私の耳へ入れるやうでは、一家觸れたに相違ない。

――處で、奴等の席へ着いた不機嫌さ。手前媽媽などの佛頂面を御覽じろ、尤も嫁を娶るに荷はあるか、と聞いたさうな。變つた鳴聲をする――こりや別です、が揃つて何の面も氣に食はん。

何が何だ、正が惚れて、甥が世話をした婦、狎でも私は構はん。

又何奴も、車夫風情の悪口を聞いて、火が出るやうに騒ぐ癖に、兒や甥を何故信ぜんのだ、水臭さが

我慢出来ねえ。

其の耳こすりをする1最中、嫁さんを迎へて歸つた、甥の奴が驅込んで、ぼる隠しの屏風の前に、それはノ、する忤の肩をたゝいたわ、持ちつけぬ扇子をぶら下げながら、

「綺麗だ、お驕り。」

言ふ罪の無さ。頂戴ものゝ被布よりか、借着の袴は私あ可愛い、何の仇に、悪いと知つて世話をしよ

屋根裏の銀簪、職過ぎます。

尼も、武家奉公の一日も勤めたらうーー車

夫が、悪口を吐くと聞いたたら、

「黙れ、當家の嫁御を、」

何故あの承塵の槍を外さんのだ、襟元につく野幫間婆め。狐の嫁入りに異存があるか。屋根裏の銀簪が何うしたよ、内の奴等。

「もし、」

と善造は聲を震はし、

「其は私も聞きまして、これへは首の座へ直り
ました心持、家内も蟲が知らせましたら、嘸今頃は
癢を惱んで居りませう、貧はすまいものでございま
す。」

と鼻をかんで差俯向く。ト座の眞中に蔓こつた
叔父の姿は威儀を正して、善造の前にひたりと坐つ
て、

「御心中御察し申す、……・・・・・兒の可愛さは
御同然、私が引受けました。御覽の通り届きません
が、誓つて嫁御に寒い思、餓い思はさせません。御
心配御無用です。」

「――最う取る年紀で、悴に嫁でも貰つたら、隠
居をと存じたが、あゝ、悴や甥が出金合つた晴着を
と言ふ御斟酌、襦袢の下に木綿の襟の肌着したのを
見ましてから、佐野の瘦馬、もう一働き、」
と袴に支いた、腕を押へて、

「やがて里開きの頃までには、打合はせの帯で
も拵へて、水際がった女房ぶりを御覧に入れる。御
案じないやう、お内方にも芽出度く御傳へが願ひた
い。御持病にお癩氣が……・・・・・あゝ、嘸、御心

勞。

と目を瞑ると、善造は震へながら、はら／＼と落
涙した。時に、内輪に美しいお銀の姿は、正面に見
るに忍びなかつたが、鴛鴦の衾にやがて差向ひにな
つた時、懐紙の間から、園女が春の菫のやう、秋の
蟲の消れた姿を取出して、御胸の情に温まらば、頓
て蘇生らむ此の蟲とて、肌身離さず持った由。
――可懐い初言葉を、私も附捺つて聞いたので
ある。

【完】